

中国における日本語教育と日本学との連携

徐 一平

1. 日本学研究センターの設立と日本学研究

次に日本語教育と今回のシンポジウムのテーマとなる日本学との連携ということについて、日頃考えていることを、センターの紹介を含めて二三、話したいと思います。

まずは、この北京日本学研究センターの歴史を簡単にご紹介したいと思います。この北京日本学研究センターが創立されたのは1985年ですが、実はその前身は中国の大学の日本語教師の全国日本語教師培训班、研修コースです。この研修コースは俗称が「大平学校」で、この名前は恐らく日本でもお聞きになったことがあると思います。これは中日が国交を回復してから、いろんな意味で交流をしたいという雰囲気の中、大平首相の時代に、首相が中国を訪問して、中国政府との間に結んだ一つの文化交流協定がありました。その文化交流協定の一項目として、当時中国の日本語教育を支援するために、日本から専門家を派遣し、図書資料を提供して、当時の中国の日本語教師、特に大学の日本語教師の再教育を支援したいということで、できたのがこの全国日本語教師培训班です。大平首相が訪問されてできた協定で、後にこれが非常に成功したために、俗称「大平学校」というふうに呼びました。当時は主に日本語教師を対象として日本語教育の現場の先生たちの研修が主な目的でしたが、5年間にわたり、1年120名、5年間合計600名の研修が行われました。私は実はその中の2期生として一年間研修を受けました。5年間後、中日双方からこの交流や協力が非常に成功したということが認識され、もう少しハイレベルの人材を育成できないか、ということで、成立したのが今日の北京日本学研究センターです。

センターとして成立したときに、大平学校時代の研修の形もやはり一つの研修コースとして継続すると同時に、もう一つの別のコースが、まさに日本学研究センターという名前の通り、日本学としての若手研究者を養成する目的で立ち上がりました。その時に考えられた専攻が、現在センターが持っている四つの専攻になっております。つまり日本語学、日本文学、それから日本社会、日本文化という四つのコースです。日本語学というのは日本語をマスターした学生を、さらに語学的研究ができるように教育するわけです。そして日本文学はさらに近代文学あるいは古典文学というふうに分けることができます。日本社会と日本文化は非常に内容豊富で、いろいろなものが入っています。センターの日本社会コースには、いわゆる社会学的なもの、それから社会問題に関連するような、例えば老人、福祉の問題とか、日本の子供教育とかも含まれます。それから、文化人類学ですが、これは実は社会コースの分野に入っています。日本文化のほうは思想史や歴史、それから、純粹の文化、日本で言いますと、伝統文化のお茶やお花、建築、美術などが日本文化の中に入ります。その中ではもう少し細かく区分できますが、全部日本社会・日本文化の中に入っています。いわば日本という研究対象を大雑把にひっくるめて研究対象とするすべての分野が入っています。それで名前は日本学という研究センターという名前をつけましたが、こちらの国際日本学専攻と、かなり重なっている部分がありますので、その意味では両者が非常に共通した考え方を持っているのだと思います。その意味でも今後どのような交流ができるか期待の持てるところです。

2. センターでの日本語教育と日本学との連携を考える上での問題

当時センターで、日本語教育と日本学との連携を考えた場合に直面した一つの問題がありました。それは日本学を専門とする研究者を育てる際に、どのような学生を募集するのかという問題です。第二次5ヵ年計画の後半に一つの転換期があったのですが、それまでセンターが募集した学生のほとんどは、大学では日本語を専門とする学生でした。特に日本側の先生たちを派遣して、教育した場合に、これらの学生は確かに日本語が上手で、日本語をマスターしているのですが、しかしいざ専門となると、ぜんぜん訓練を受けたことのない学生ばかりだという共通認識がありまし

た。日本語は喋れますが、当時中国の学部では、まだまだ日本語学に関する専門知識は教育していません。文学もそうです。社会文化になるとなおさらです。社会学とは何かということが全くわからないような学生を募集して、はたして研究者として育てられるかという疑問が当然起こりました。しかし、いろいろ議論した結果、私達は最終的にはやはり日本語を専門とする学生を募集する方針を捨てませんでした。

学者を育てる方向、特に日本学を研究する学者を育てる方向としては 二つの可能性があると思います。一つは専門から入る方向です。大学時代で社会学を勉強した学生が、専門的な訓練を受け、研究の途中で日本に興味を持ち、関心を日本に絞る、そういう研究者の育て方もできます。第二の方向は、日本語を勉強する中で日本と出会い、さらに日本の社会、文化に興味を持ち、その上で専門的な訓練を受け、学者として、研究者として育っていく。

センターの歴史から見ると、特に日本語に出会った学生を募集して、研究者として育てる。そういうルートで成功している例が数多くあります。博士課程を卒業後、最終的に今中国国内で日本研究の中堅となった例が数多く存在しています。センターがもしこちらを捨てて、いわゆる専門の学生を募集する道をとった場合、他の大学、例えば北京大学や社会科学院で養成する学生とどこが違うかということになります。それからもう一つ、センターは日中共同事業であるため、派遣された先生方は皆日本の先生です。他の北京大学、社会科学院のケースでは、派遣された先生が、日本語をあまりマスターしていない学生に授業をする時には、通訳をつけて授業をしています。通訳をつけて授業をすると、いくら優秀な通訳でも、百パーセント通訳できていない場合がほとんどだと思います。そのような授業をうけた学生がどれだけその日本人の学者の言ったことを吸収できるのか。そう考えると、センターはやはり日本語を専門とする学生を募集するという方針を選択しました。もう一つ、海外で自国以外の国を研究する場合に、その国の言葉で学ぶというのは一つのルートだと思います。例えば、日本人の学者の中に中国を研究する学者がたくさんいますが、その人たちの多くはやはり最初中国語を勉強し、中国に対して興味をもって、そして中国語をある程度でマスターした時点で、今度はいわゆる中国のほかの研究に発展していくというのが恐らく研究者、学者を育てる一つのパターンであると考えていいと思います。そのような意味でセンターの歴史はまさに日本語あるいは日本語教育から日本学へ展開していくと考えていいと思います。再来年でセンターは20周年になりますが、この方針は今後も堅持していきたいと思っています。

実は中国では、日本語専攻を持っている大学にも要望として出していますが、今まで、日本語教育というものは実用主義になっており、聞く、話す、読む、書く、翻訳、という非常に実用的な訓練を強調しています。その国の言葉の背景にある文化的な知識、あるいはその国を対象とした研究につながるような教育は、まだままだの状態です。学部時代でそのような教育を導入すべきではないかということをセンターが呼びかけ、中国の日本語専攻を持つ大学でも徐々にそのような認識になり、総合的な日本語教育に目覚めてきました。これは一つの進歩だと思います。実は来月12月の6日、7日に、北京外国語大学日本語学部の呼びかけで、全国の日本語学部を持つ大学の人に集まってもらい、現代日本語教育と関連するカリキュラムに関するシンポジウムを開催しようと企画しています。そこで現代日本語教育と関連して、総合的な日本語教育、例えば、日本語教育と関連する日本事情、あるいは文化的な背景をいかに日本語教育の中に導入していくのか、そのようなカリキュラムに関する検討がなされると思われますし、これから中国国内でも展開していきだろうと思っています。これは日本語教育現場での日本学との連携の一例ですが、センターとしても共同研究を通して、日本学と連携していくことが考えられると思います。

3. 日本語教育と日本学との連携に関する今後の課題

最後に私は、日本語教育と日本学との連携に関する今後の課題について考えてみたいと思います。一つは資料データのことです。実は先週香港で香港日本語教育学会主催の第6回日本研究、日本語教育の国際シンポジウムがありました。そこではネットワークがテーマでした。そこでもちょっと話しましたが、海外で日本語教育あるいは日本学研究をする際に、まず直面する一つの大きな問題として、やはりデータ資料の不足があります。韓国の場合はよくわかりませんが、特に中国ではこれはまだ非常に深刻な問題になっています。センターは国際交流基金の支援や、有志の方のご支援をいただき、今10万冊所蔵の、日本研究に関する図書資料館を持っています。特に去年から新館ができ、一番拡張されている図書館は、収蔵量としてはおそらく20万冊まで収蔵可能なスペースを持っています。そ

の図書資料も日本国際交流基金と日本国立情報学研究所のご協力をいただき、コンピュータ管理になっています。しかし、中国全土を見た時には、必ずしもそのような状態になっておりません。それはコンピュータ時代を迎え、中日交流の中で、コンピュータの資料管理のシステムは今後一つの大きなネックになると思われます。中国国内で出された図書館管理システムは中国の図書あるいは、英語圏の図書を管理することはできますが、日本語の図書は管理ができません。そこに入力すると、文字が全部文字化けしてしまいます。センターが3年ほど前から自分の図書整理を始めましたが、と同時に全国の日本語図書の現状についても調査を行いました。調査した結果、上海図書館、大連図書館、天津図書館などのいろいろな都市の図書館、あるいは日本語教育、日本研究が盛んな上海外国語大学や、复旦大学、南開大学などの大学では、多くの日本語の図書資料をもっていますが、コンピュータの問題によって、放置されたままとなっているか、あるいは旧態依然としたカード式管理がなされている状態です。そのような状態では、結局利用者が減っていく。すでにコンピュータ管理された情報に慣れた学生からみると、一々カードを使うのは、もう面倒で利用したくない。さらにカードさえない資料であれば、恐らくもう誰も利用しない。そのように眠っている資料がまだたくさんある。その整理をしないと、中国の日本語教育あるいは日本研究はずっと今の状態のままで発展できません。このようなデータ整理を中国国内で完成していきたいということと同時に、できれば、今日は情報化時代ですから、他の国、日本、韓国とのデータ資料の連携を図れば、世界における日本語教育、あるいは日本研究がかなりまた大きく発展するだろうということを念願しております。これが一つの課題です。

もう一つの課題として日本語教育現場が考えなければならないことは、今後の日本語学習の動機付けの問題です。これからの日本語教育には、新しい日本の魅力をこれからどのように発展させていくのか、ということをやはり考える必要があると思います。中国の日本語教育の歴史を振り返った時に、最後の段階に積極的に日本語を学習する時代がありましたが、それはある意味では積極的で、ある意味では受身的と言ってもいいのですが、その積極性は、日本の高度経済成長の影響が大きいと思います。しかし、今日、日本はバブル経済が崩壊し、またいわゆる日本型の経営はもう神話ではなくなってしまった今、今後日本はどのような魅力があるのか。そのような魅力がなければ、恐らく日本語を勉強する人口は減っていくかもしれないし、また日本語離れが起きるかもしれません。そうなるとそのから日本学研究も衰えていく、その可能性はないとはいえません。

九州のユネスコ団体で、毎年国際シンポジウムを開いていますが、一昨年講演をされた加藤周一先生が、今後日本語は減っていくのではないかという話をされました。もちろん加藤先生は日本人ですから、これはたぶん警鐘を鳴らすつもりでお話になったと思いますが、その危険性はないとも限りません。私の考えでは、恐らく今後の世界は二つのパターンに分かれると思います。例えば、いわゆる理科系のような科学技術的な面を考えた場合には、迅速性を必要とする。そこには共通性や、一元性が強調される部分もあるかもしれません。その中での英語の力は誰も否定できないのですが、何か共通でコミュニケーションできる一つの言語をもとめていくと思います。しかし、文化面ではむしろ多元性を求めていくのではないか。その時に各国の文化、各民族のアイデンティティが尊重される時代となり、日本民族、あるいは日本という国としては自分の新しい魅力をもって、世界の若者に対して訴えていなければ、その日本語の魅力についていく若者が減っていくのではないか。そういうことについて、日本語教育者は、私たち中国圏の日本語教育者を含めて、考える必要があると思います。もちろん日本語は英語に代わるものではありませんが、例えば、アジアという範囲内では日本語が媒介となるような可能性はまだ大きいので、ぜひその可能性を拡大する努力をする必要があると思います。

さらに中国国内の日本語教育は、今後は恐らく第二外国語としての教育の市場が第一外国語を上回るのではないかと思います。第二外国語として教育するときには、どうしたらいいのか。そういうことをそろそろ考える必要があるかもしれません。これは日本語教育専門家には明らかなことのように思われるかもしれませんが、現場に行きますとまだそのような認識がなされていないのが現実だと思います。例えば私には人民大学の付属中学校に通っている息子がいますが、その中学校では第二外国語を教える試みをしています。今はまだ週末クラスですが、その中には日本語も含まれています。うちの息子は去年興味半分で第二外国語の日本語クラスを選んだのですが、三ヶ月でやめてしまいました。今日は第二外国語の日本語の授業があるのではないかと聞きますと、面白くないということです。その理由は第二外国語を週末の遊びの時間に選んだのに、先生は第一外国語のように厳しく教えているからだといいます。そのため中学三年生の子供からみると、ぜんぜん面白くない。その結果選択科目だから、途中で捨ててしまったとい

うわけです。交流の手段としての第二外国語と、就職のための第一外国語との違いといったことをそろそろ考えないと、中国における日本語教育もまた大きな問題を生むのではないかと思います。

例えばお茶の水女子大には中国語教育に相原茂先生がいらっしゃいます。東京駅前のブックセンターで、思いかけずに相原先生のコーナーが出来ているのを発見しました。コーナー全体が相原先生の本です。そこには『ときめき上海語』とか、何かテーマだけを見ても、これは面白そうと読みたくなる本が並んでいました。そのようなことを私たち中国人日本語教師ができないかということを痛感しました。今後ぜひこちらの日本語教育の専門家の方々にもご協力いただきまして、中国の日本語教育の発展のために、努力していきたいと思います。ありがとうございました。